

## 散弾が確認されたコハクチョウについて

毛利 崇

682-0025 倉吉市八屋214-10, dorinken@apionet.or.jp

1月の下旬に米子市水鳥公園にて衰弱して飛べなくなっているコハクチョウの成鳥が確認され、公園職員の方々が保護を試みたものの、水面を泳ぐ力は残っており、2、3日の間は保護することが出来ませんでした。やがて衰弱して保護され、鳥取県の林業振興課より傷病野生鳥獣の救護の委託を受けている当施設に運び込まれました。体重が6kgの立派な体格の成鳥でしたが、極度に衰弱していました。触診上で外傷や骨格の異常は見つかりませんでした。レントゲン撮影検査中に呼吸停止を起し、蘇生処置を試みましたがそのまま心停止に至りました。

レントゲン検査上では腹腔内に2発の散弾が確認されました。分厚い羽毛に包まれているため、外部から銃弾が侵入した部位を特定することは困難でした。その後鳥取県林業振興課の依頼により剖検を行い、腹膜直下に留まっていた直径6mm程度の鉛の散弾が摘出されました。散弾は背側より侵入し内臓を貫通した後に肋骨に衝突して止まったものと推察されましたが、腹腔内の臓器に新しい出血跡は認められませんでした。摘出した散弾は鳥取県林業振興課が由来を調査する為にメーカーに照会を依頼したとの事ですが、成分や硬度などで国産と外国産に差がなく、由来を

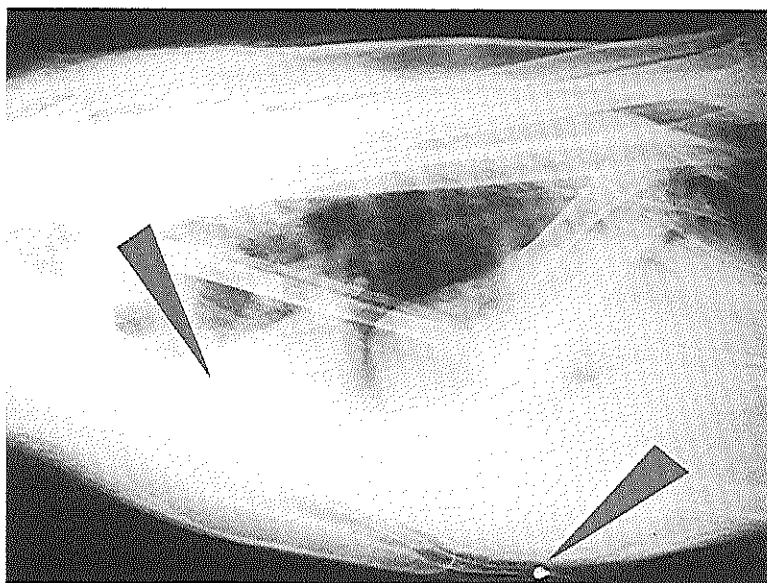


図1.コハクチョウの腹部レントゲン(側面)。矢頭の部位に2発の散弾が認められる。

調べることは難しいとの回答であったようです。

コハクチョウは日本国内では手厚く保護されており、狩猟の許されている鳥ではありません。しかし、コハクチョウが夏の間過ごすロシアでは自治州ごとに狩猟の規制の体制が異なり、必ずしも狩猟が規制されている訳ではないそうです。ロシアで撃たれたコハクチョウが何とか日本まで渡ってきたもののやがて衰弱していったという可能性もあります。しかし、経緯から推察する範囲ではシベリアから渡って来る力があるものがここへ来て急に衰弱すると考えるよりは、国内で撃たれたと考える方が自然であると思えます。国内で撃たれたと考えた場合、密猟あるいは誤射のいずれとも考えられます。

(財)鳥取県動物臨床医学研究所では、小動物診療と同時に傷病野生鳥獣の救護・リハビリを行っており、コハクチョウも少なからず保護されますが、衝突事故による骨折などが大半を占め、今回のように撃たれたケースは稀です。今後とも注意して動向を見守っていく必要があると思われれます。

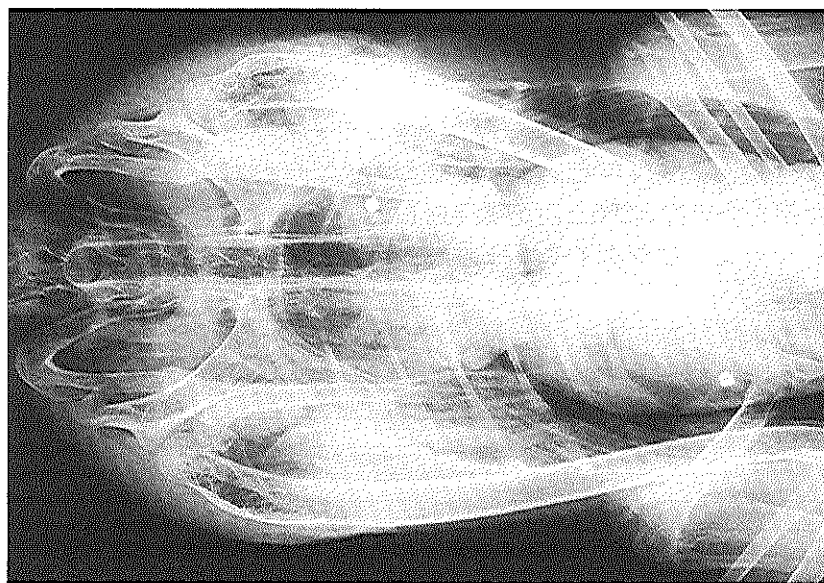


図2.コハクチョウの腹部レントゲン(背面)。